

解説 1

戦後の工作機械業界における 輸入工作機械の動向

藤田哲三

日本工作機械輸入協会

1945年8月15日に太平洋戦争が終戦を迎え、その後の日本経済は駐留した連合国軍総司令部（GHQ）の管轄下におかれて完全に機能不全の状態に陥った。50年、朝鮮戦争の勃発を機に、米軍から受注した戦争特需品生産のための機械設備需要が急増したが、戦時中に疲弊した国内工作機械業界では需要を賄い切れず、輸入工作機械の導入が急増した。この状況を改善しようと、政府は度重なる外国工作機械模倣令を出して改善を図ったが、模倣だけでは対応できず、欧米工作機械メーカーとの技術提携で技術力を蓄える道を選んだ。日本の工作機械産業は、おりから開発されたCNC装置を工作機械制御に取り込んで、高度経済成長期には輸入工作機械と共存しながら急伸する国内需要を満たし、また海外進出にも成功して工作機械生産世界第1位まで駆け上がった。リーマンショック後、生産高世界第1位の座こそ台頭する中国に譲ったが、その後も日本の工作機械業界は、進化する技術革新に挑みながら世界の工作機械産業の牽引車として力強く活躍している。

急増する輸入工作機械

1950年に朝鮮戦争が勃発、GHQの要請で部分的に製造禁止令が解除され、朝鮮戦争特需品として受注した自動車や造船、重機産業などで増産のために必要な機械設備導入が検討されはじめた。工作機械の需要は急伸したが、戦争で疲弊した国

内工作機械業界ではとても対応できず、むしろ輸入工作機械の増加に結びついたことが当時の状況の特徴付けている。

急激な戦後復興を目指して51年に交付された「重要機械類の輸入税免除措置」と52年に公布された「工作機械輸入補助金交付規定」は当時の国産工作機械より欧米工作機械を輸入して設置するという国内ユーザーの風潮に拍車を掛けることになった。また、産業界全体の設備更新を促進するために公布された「重要機械類の輸入免税制度」は輸入工作機械をさらに支援する結果となった。

その結果、工作機械の輸入依存度は53年は42.4%、54年は51.9%、55年は57.7%と上昇して国産工作機械の受注を妨げる結果となった（図1）。

当時、欧米先進国から輸入され、製造業の復興現場でたくましく活躍した高性能工作機械メーカーと主力機を挙げる。

[米国]

DEVLIEG（精密中ぐりフライス盤）

THE GLEASON WORKS（かさ歯車創成盤）

GIDDINGS&LEWIS（横中ぐり盤）

GLAY（プレーナー）

[ドイツ]

SHARMANN（横中ぐりフライス盤）

VDF WOHRINGER（大型旋盤&プレーナー）

WALDRICH COBURG（門型ベッド研削盤）

PFAUTER（大型ホブ盤）